

# 全国林業後継者大会 in 新潟

2014年5月31日(土)、長岡市のアオーレ長岡を会場に「第43回全国林業後継者大会」が開催された。シンポジウムの第一部はトークセッション。林業をテーマにした話題の映画『WOOD JOB(ウッジョブ)』と『神去なあなあ日常』の矢口史靖監督と新潟大学農学部教授の箕口秀夫教授が出演し、林業の魅力と現実について語った。



↑会場のアオーレ長岡では林業関係者、市民を交えた参加者が出演者の話に聞き入っていた

**江口** 皆さん、こんにちは!! トークセッションの司会進行の江口です。まずは箕口さんから自己紹介をお願いします。

**箕口** 新潟大学農学部の箕口です。林業のことを研究しているのは農学部なんです。私は主に山の生き物の環境を調べていますが、最近山に棲む動物たちが反乱を起こして大変なことになると思います(苦笑)。

**矢口** 今回、『WOOD JOB(ウッジョブ)』(神去なあなあ日常)という林業の世界に飛び込んでしまった若者の悶絶の日々を描いた映画を撮りました矢口です。こういう場でのトークは滅多にないことで緊張しています。よろしくお願いたします。

**現場での体験によって 林業の豊かさに気付いていく**

**江口** 今日は県外から来ている方も多いため、箕口さんに新潟県の紹介をお願いしますか?

**箕口** 新潟は米と酒がおいしいので農業県というイメージが強いのですが、おいしい米を育てるには豊かな水や業

います。けれど何カ月かの研修を体験し、現場で働くようになり、体力も追いついてくるとそれまで普通に暮らしてきた生活の中では体験できなかった林業の豊かさに気が付いていくと思います。

**小説では林業が魅力的に描かれ 想像したことのない世界があった**

**江口** そもそも監督はなぜ、林業の映画を撮ろうと思ったんですか?

**矢口** 僕はこれまで面白いと感じると、実際に取材し、自分が体験したことを脚本にして映画にしてみました。今回は三浦しをんさんの『神去なあなあ日常』という小説が元になっています。三浦さんのおじいさんが実際に三重県の奥地で林業をしていて、それをモデ

養分が必要です。それは豊かな森があるからこそ。新潟県は農業県でもありますが森林県でもあり、約7割は森です。今日の会のように林業の後継者が育っていけば、新潟県はもっと林業県として飛躍できるのではと思っています。

**江口** 後継者を育てるならまさに監督の映画を観たらいいですよ。林業の魅力も感じられるし、「映画のように長澤まさみのようなかわいい子と付き合えたらいいな」と思うでしょう(笑)。

**矢口** ただ、映画と違って現実には甘くありません。環境も厳しいし、仕事もキツイ。映画では、主人公が「緑の雇用制度」のパンフレットに載っていた美女に釣られて「あの子に会えるんじゃないか」という下心で林業の世界に入ります。携帯の電波も入らないような辺鄙(へんび)な村で生活するうちに、村人との交流や林業家との出会いなど、時間をかけて林業の魅力を実感し、最終的に山に残って仕事をする選択をするという話です。実際に全く林業に興味のない男の子が、林業に初めて触れたときに全ての人が一生の仕事に林業を選ぶかどうかはなかなか難しいと思

映画監督 矢口史靖 やくちしのぶ



1967年神奈川県生まれ。1993年『裸足のピクニック』で劇場監督デビュー。2001年“男子のシンクロ”というユニークな題材が話題を呼んだ『ウォーターボーイズ』が大ヒットを記録。その後『スウィングガールズ』(2004)、『ハッピーフライト』(2008)、『ロボジー』(2012)を発表。芸術性と興行での動員力を併せ持つ日本映画界の至宝。

新潟大学農学部 生産環境科学科 教授 箕口秀夫 みくちひでお



1959年長野県生まれ。新潟県林業試験場主任研究員を経て、1996年新潟大学に着任。専門は森林学・生態学で、森林生態系における生き物の様々な相互関係等を研究。その成果を、野生生物を生かした地域のあるべき生態系の再生や森づくりに応用しようとしている。現在は新潟大学農学部副学長として「農力」開発プログラムによる人材育成も推進中。

【司会進行】

NAMARA代表 江口歩 えぐちあゆむ



1964年新潟市生まれ。1997年全国初の地方発信型お笑い集団NAMARAを設立し、代表としてイベント・人材育成・講演会などを行いながら現在に至る。2010年新潟県元気大使、2012年SWCIにいがた健幸大使就任。





↑ 林業を仕事に選んだ多くの若者たちは山に興味を持ってやってくる

か？  
**箕口** いや、実は農学部といつても親が農業をやっているとか山を持っていくようなケースは少なく、ほとんどの学生の親は普通のサラリーマンです。ただ、みんな、やる気があるので4年間の中で経験を上手に積ませたいと思っています。そういう意味でこれからは、実家が農業や林業と無関係の子どもたちが日本の第一次産業を支えていくという構図が主流になっていくのではと思いますね。  
**江口** 新潟県は国から指定されている伝統工芸品を京都と同じ位、たくさん作っています。やはり後継者問題が出てきています。息子たちはサラリーマンをやっている、後継者は血縁では

ない場合が多い。林業だけの問題ではないですね。  
**不便と引き換えにしても自然から得られるものは大きい**  
**矢口** 今どきの若者たち——これから社会に出る学生たちが「自分に合っている仕事って何だろう？」と探したときに、今はインターネットというとても便利な道具があつていくだけでも簡単に調べられます。でもそこにはマイナスイノベーションもある。本来なら若いからいるんなことにチャレンジできる可能性があるにも関わらず、情報量が多すぎるせいで二の足を踏んで、その先に行けない壁を作っているように思うんですよね。今回の映画では林業とい

で山を登っていく。だからおじいちゃんや林業をやっているも働いている現場まで見に行ったことがある子や孫はそう多くないかもしれないですね。映画を見るとその辺も分かってもらえると思います。林業を全く知らない人たちにとつて、この映画はとても良いきっかけになるのではと思っています。そこから興味を持って、「今度、じいちゃんや山で作業している日にちよつと行ってみようかな」と——で、実際に行ってみて「俺には無理だ」って思うかもしれないし「これ、やってみようかな」と興味を持つかもしれない。  
**江口** その点で言うと、モチベーションの高い箕口さんの学生さんたちは親が農業や林業関係者が多いのでしょうか？

## 森には想像力と創造力を養う力があります



新潟大学教授：箕口秀夫氏



↑ 多くの荷物を持って、道なき道を今日も行く

## 厳しさの先にある林業の豊かさを伝えたい



映画監督：矢口史靖氏

ルに描かれた小説なんです。実際にその村に行ってみたらとても良い所だったので、撮影もそこでやりたいとシナプルに考えたんです。  
**江口** 初めて原作を元に撮りたいと思ったのはなぜでしょう？  
**矢口** 僕自身、本当に失礼ながら林業についての実態を想像したことすらなかったんです。でもその小説には、林業に携わる人たちがどういう暮らしをして、どういう価値観で毎日、木を切って植えているのかがとても魅力的に描かれていました。映画にも登場しますが、100年を超える杉の木の伐倒や母樹から種を獲るなど、僕が想像し

たことのない世界があつたので、林業の世界をリアルに描くにはどうしたらよいかを特に気を付けましたね。都会からやってくるへなちよこの主人公役の染谷将太君や村の厳しい先輩役の伊藤英明さんをはじめ、林業家を演じる人たちは全員、チェーンソーの研修を受け、斧の使い方も練習してもらいました。ですから、伐倒シーンや高い木に登ってもらうシーンも、一切、吹き替えなしです。  
**農業や林業と無関係の子どもたちが今後の第一次産業を支えていく**  
**江口** なるほど。一方で、長く林業を

専門にしてきた箕口さんは、林業の現状についてどう思われていますか？  
**箕口** 例えば、今年（新潟大学に）入学した学生に「どうして農学部を選んだのか？」と聞くと、地球温暖化防止、砂漠の緑化、森林保護などがキーワードとして出てきますが、残念ながら林業という言葉は出てきません。これは1978年に小学校の教科書から林業という言葉が一時なくなってしまったことから林業がマイナーな存在になつてしまつたのではと思つているのです。  
**江口** 担い手問題に関しては、以前仕事で林業家さんと話したときに、山



↑ 映画『WOOD JOB! ～神去なあなあ日常～』のワンシーン

を守っているおじいちゃんに対して息子や孫が「お金にならないことをやっている」というムードがあると聞きましたが…。  
**箕口** 第一次産業全体に言えることですが、農家では子どもに農業を継がせたくないというような、みんなうつむいてしまつているところがありますね。この仕事は意味があると親子の中で話し合うような仕組みがなくなつてきているように感じます。  
**矢口** 林業は実際に作業する現場に行くまでも大変なんです。車が入れる所も限られるので、その先はチェーンソーと燃料と弁当と水を持って現場ま



司会進行:江口歩氏

## もつと林業家を 評価すべきアナウンスが必要です

**林業だけが先祖から受け継いだ  
自然に利息を付けて返せる**

**箕口** 明治の哲学者の内村鑑三の『後世の最大遺物 デンマルク国の話』という著書に木を植えることによってその国が救われるという話があります。「後世への遺物」というのはまさに矢口監督が林業について言われたのと同じです。監督は映画を遺すことができます。私はがんばって論文を遺すことができます。しかし、必ずしも全ての人々が何を後世に遺せるわけではない中で、林業家の皆さんは後世に素晴らしいものを遺すことができるわけ——それだけで素晴らしいと常々感じています。ネイティブアメリカンの言葉に

「自然は子孫からの借り物である」とあります。「自然は実は先祖からもらったものではなくて、子孫から今、借りているんだ」と。借りているものは利息を付けて返さなければいけないのですが、今、利息を付けて返せる産業は林業しかないのではと感じています。

**江口** 箕口さんのお話にあったように、僕らも素晴らしい森を守っていくという意識を持つべきだし、林業家が素晴らしいことをしているというアナウンスがもつと必要だと思いました。今、便利な社会で簡単にすぐ結果を求めがちですが、監督のお話のように、そういった時間とは違った、ゆったりとした自然の時間を感じられることが林業の一つの魅力なのかなと思いましたね。



↑現場作業はチームワークが重要。休憩時には笑顔があふれる

**今、植えている木は自分たちが  
死んだ後の未来を作っている**

**箕口** 先ほど小学校の教科書から林業がなくなったと話しましたが、最近では「森の保育園」「森の幼稚園」という形で森の中で子どもを自由に遊ばせるのが情緒教育に良いという効果が科学的に証明されています。私は森の中で

「自然は子孫からの借り物である」とあります。「自然は実は先祖からもらったものではなくて、子孫から今、借りているんだ」と。借りているものは利息を付けて返さなければいけないのですが、今、利息を付けて返せる産業は林業しかないのではと感じています。

**江口** 箕口さんのお話にあったように、僕らも素晴らしい森を守っていくという意識を持つべきだし、林業家が素晴らしいことをしているというアナウンスがもつと必要だと思いました。今、便利な社会で簡単にすぐ結果を求めがちですが、監督のお話のように、そういった時間とは違った、ゆったりとした自然の時間を感じられることが林業の一つの魅力なのかなと思いましたね。

「自然は子孫からの借り物である」とあります。「自然は実は先祖からもらったものではなくて、子孫から今、借りているんだ」と。借りているものは利息を付けて返さなければいけないのですが、今、利息を付けて返せる産業は林業しかないのではと感じています。

は、二つの「そうぞう力」が養われると考えています。一つはイマジネーションの想像。もう一つはクリエイティブの創造です。森の中では、人間の一生よりももつと長い時間軸で物事を考えます。映画にも出てきましたが、50年後、100年後を想像して物事を進めていくことは、精神の活性化、ボケ防止にもつながると思います。

**矢口** 実際に林業家の方から聞いた「自分たちが苗を植えて育てている木が実際に使えるのは10年先、100年先でその成果を僕らは見られない。すべては自分が死んだ後に評価される」という話がすごく印象的で、映画のセリフに使いました。農業だったら育った作物を食べられるし、食べた人から「おいしかった」という声も聞けるけれど、林業はそうはいかない。木の方がずっと命が長くて、自分がその木に関わる時間はすごく短い時間ではないかと。その話を聞いたときに非常にすつきりするとともに、「どこにもモチベーションがあるんだろう」と不思議な気分になったんです。普段、仕事をしている人間は褒められたり、自分が作ったものの対価でモチベーションを保っていると思うんですが、林業は過去から受け継いだものを自分たちで使い、今、植えている木は自分たちが死んだ後の未来を作っているということが分かったんです。そんなとても荘厳で神聖な仕事でありながら、チェーンソーでぶった切ったり、作業はパワフルでとてもカッコいい。そういった実

体験で得た林業の両面を描きたいと心の注意を払いました。でも、実際に僕が林業家になってみたいと思うまでには至りませんでしたね。なぜかと言うと、今回、撮影中にマダニに刺されて「やっぱり森は怖い」と(笑)。マダニって本当に危険なんです。せっかくなので、映画の中では主人公がマダニではなく、ヒルにやられるシーンとして使いましたが(笑)。山はすてきな場所だけど、ほかの生き物たちもたくさんいて、一緒に仕事をしていく覚悟も必要。そんなたくさんの方の先にある豊かさが伝わればいいと思います。



↑100年後の大木を夢見て、苗木を植える